

## 石黒忠憲とリスター防腐法

— 1876年フィラデルフィア万国医学会での体験 —

月澤美代子

順天堂大学／明治大学／M-医学史・科学史研究室

## 1. 石黒忠憲『懐旧九十年』の記述

陸軍一等軍医正・石黒忠憲は、1876（明治9）年、日本政府代表としてフィラデルフィア万国博覧会の視察に派遣され、同時に開催されていた万国医学会に出席した。忠憲が晩年になってから刊行された『懐旧九十年』には、フィラデルフィア万国医学会での体験として次のようなエピソードが語られている。少し長いが、引用してみよう。

当時、卵巣水腫切除については実地外科の世界的大家と言われる英国のスペンサー・ウェルズ氏が出席し、リスターの防腐外科による開腹術の成績に関する講演をして、自分のやった卵巣切除では、これによって百に約八十五の好結果を得た、と発表したところ満場大喝采でした。ところが、その時、遙か末席から、反対！反対！と叫んで起った者があります。見ると田舎者らしい一老医です。

「満場侮蔑の視線を受けながら」、この一老医の発言は次のように続く。「私は石炭酸のような臭いの」は使用せず、温湯を使って「卵巣切除の好成績を収めている」。石黒忠憲は、この老医の発言内容を具体的に記述した後、「学理」と「経験」について、きわめて含蓄深い述懐をしているのだが、本発表では、次の点にのみ注目してみたい。すなわち、フィラデルフィア万国医学会の公式記録によると1876年のフィラデルフィア万国医学会にスペンサー・ウェルズは出席しておらず、発表を行っていない。また、この医学会場において、リスター防腐手術は、アメリカの医師たちに「満場一致」の賛意をもって迎えられては、いなかった。

## 2. 1876年フィラデルフィア万国医学会におけるリスター講演

フィラデルフィア万国博覧会はアメリカ建国百年を記念して開催され、この会期中の5日間、サミュエル・グロスを会長として万国医学会が開かれた。これは、アメリカで開催された初めての国際医学会であり、同時に、日本政府が初めて代表を派遣した国際医学会でもあった。この医学会とこれに続くアメリカ・ツアーでの体験は、参加した石黒忠憲、長与専齊、三宅秀の3人に強烈なインパクトを与え、明治初期日本の医療制度の形成にも大きな意味をもった。既に滞欧経験をもっていた長与、三宅と異なり、石黒忠憲にとって、これは初めての洋行であり、国際医学会という場に曝された、いわば最初のExposure体験であったといえることができる。

一方、当時、エジンバラ大学の教授だったジョセフ・リスターは、この万国医学会に外科セッションの会長として参加し、会場からの要請に応じて演示を伴う講演を行った。この講演後、リスターはアメリカ国内を防腐手術法の講演をして回ったが、このツアーがアメリカ国内での防腐法普及に与えた影響については、しばしば論じられてきた。

リスター防腐法は、1867年にランセット、ブリティッシュ・メディカル・ジャーナルで一連の論文発表が行われた後も、1870～1890年にかけて、リスター自身、さらには、後継者W.チェインらにより、新しい知見を取り入れて時々刻々と「改良」され、細部が「変化」し続けてきた。

本発表では、まず、彼らの参加した万国医学会の概要を説明し、1876年という時点において、リスター防腐法とは何であるとリスター本人が説明し、それをアメリカの外科医たちは、どのように受け止め反応していたのかを検討したい。さらに、出席した日本人軍医・石黒忠憲の中で、この体験がどのように受け止められたかを追体験し、医療情報の伝達について考える手がかりとしてみたい。

本発表はJSPS 科研費15K01121の補助を受けて行われました。